

# 奥村 明 著「セレベス戦記」(第4部)

## 山嶽咆哮

### 山ビル陣地

私と寺内少尉はパレパレ北方二百キロの山嶽盆地マカレに駐留する大神中佐の指示を受けた。寺内はマカレの大神部隊に所属して、現地青少年およびジャワから徴募した兵補の教育にあたることになった。私はマカレから二十キロのランテパオに至り大竹少佐の指揮下に入れ、という。

私は大竹少佐との「悪縁の深さ」に苦笑した。(とうとう、あの雷少佐の部下になってしまったのか。くされ縁というか、これから四六時中にくされ通しか。やれ、やれ、先がおもいやられる)

その日はマカレの町にとどまり、散歩したり小さなレストランに入ったりして寺内少尉とすごした。

マカレの町も、山嶽地帯の中にある標高八百メートルの盆地で、付近はジャングルに覆われている。日本で例えれば、パレパレを名古屋とみると、木曾谷をさかのぼり鳥居峠をこえ、信州の塩尻へやってきたようなものかもしれない。マカレはオランダ時代に司政庁のあったところで、しゃれた洋館が二、三軒のこっている。近くに標高三千四百五十五メートルのマンテマリオ山がそびえていて、南北アルプスにかこまれた信州ににている。歩いてみて、まるで違う「異国」を発見するのは造作もない。

マカレの住民は、先住民族であるトラジャ族の後裔である。トラジャ族は元々海岸付近を居住地としていたが、海岸線に勢力を形成したブギス族に征圧され、のがれのがれて、ここ、マカレ付近の天嶮に要塞を築き戦いつづけた。ブギス族は今でも、「トラジャ人は、われらの奴隷の民なり」と豪語しているという。

私が目をみはったのは、切り立った断崖に岩穴を掘りぬき、あるいは天然の岩の裂けめを利用して、家族が原始のままの生活を営んでいることであった。

昔、手斧などで営々と掘ったという岩穴の内部の墓にはおどろかさされた。外部からは、絶壁にうがたれた四角の窓のような岩穴が黒くならんでいるように見えるが、内部は広くふかい洞窟で、断崖の側面から掘りぬいた回廊が内部で連結されている。古代のトラジャ人は、死者とともに宝物を保存するとともに、ブギス族の侵入・掠奪にそなえて、墓地を要塞化したものであった。

高貴な者ほど、高い場所にある洞窟に葬られている。仮装の者は中央墓地から次第に低い場所の岩穴に埋葬されるが、この埋葬様式はトラジャ族の尊厳と偉大さを下界の人々に誇示するためでもあるという。

いまでも、ここの住民は婚礼などはできるだけ質素にするが、葬式となると一世一代の巨費を投じるならわしだという。固い岩盤の絶壁を見上げただけでも気が遠くなりそうなところを、手斧などで掘り進み貫徹したトラジャ族の執念といったものが伝わってくる。いまや、古代文化の遺跡としても瞠目にあたいするものではあるまいか。

私たちはトラックで山嶽地帯の峻険を抜いてマカレに来る途中、奇怪な岩穴を何度か目撃したくらいで、要塞墓地は一か所や二か所ではない。トラジャ族の後裔原住民はおよそ百万人といわれて

いるが、南部セレベス山嶽地帯(日本本州の約半分の広さ)に分散居住している。現地人に聞くと、そもそも「トラジャ」の語源は、山嶽居住者ということだそうである。

私は寺内と二人で、ちかじかと原始トラジャ族の遺跡、現在でも使用している岩穴を見学した。翌朝、寺内と別れ、私一人トラックに便乗して赴任地ランテパオに赴いた。が、このとき私自身を断崖絶壁の岩穴を掘りぬくという任務が待っているとは夢にもおもわなかった。

ランテパオもまた、マカレと同じ山嶽地帯の一翼にあたる町で、絶壁とジャングルにかこまれた盆地である。東方はるかに低くボネ湾が隠見され、ちらりと水の色の光るのが峠から望まれた。ランテパオは商業の町と言われ、華僑の店が多い。住民は、アラブ人、トラジャ人、その混血などであった。

標高九百メートル。ランテパオの町だけみると、マカレを塩尻にたとえて、ここは松本ということになるかも知れない。だが、少し町をはずれると、そそり立つ断崖とその上にひろがる山脈、千古人跡未踏の真っ暗な深いジャングル地帯になる。しかし、私の新任部隊の宿舎は、避暑地のような街の中ではなく、この恐ろしいジャングルを切り開いた一角にあった。与えられた仕事は、ブギス族に追われて断崖に岩穴をほったトラジャ族のように、敵の反攻上陸に備えての要塞を築くことであった。私は、ブギス族に対するトラジャ族、米英軍に対する日本軍、そして岩穴掘りという対照の妙に、不吉な予感を覚えた。どうも、ありがたくない新任務であった。

大竹大隊は、司令部直属の戦闘部隊で、ランテパオの守備が任務であった。大隊は、本部および二個中隊の編成である。赴任と同時に、私は第一中隊(中隊長・阿部中尉。福島県郡山出身)の第二小隊長に任ぜられた。中隊は二百名、三個小隊の編成である。第二中隊長は川辺中尉で、安倍中尉とともに歴戦の幹部候補生出身である。わたしにはどちらも頼もしい上官に見えた。兵士は、セレベス直行の農耕兵から転入してきた者が多く、戦闘の基礎訓練は未熟にちがいがなかった。しかし、ほとんどが三十二、三歳の分別ざかり働きざかりの男たちで、社会的な経験も豊富であり、命令のみこみもはやかった。私としては、まず直属上官の阿部中尉にも、部下達にも、満

足した。

私は現役時代に、重機関銃の教育を受けていたので、海上輸送隊も港の揚陸作業も、適した任務とはいえなかった。特に長い期間の埠頭作業にはうんざりしていた。こんどは港ではなく山に入り、正規の戦闘部隊に編入されたのである。歩兵として本望といわなければなるまい。だが、敵を迎えて戦闘を開始するまでに、大自然の堅塁ともいべき断崖絶壁の地形を利用して、完璧な銃砲眼を、まず、構築しておかねばならないという。自分の手で岩に穴をうがち、堅固な要塞をつくっておいて、敵の侵攻を阻止する。まことに気の長いしんどい仕事であった。

私は、雷部隊長大竹少佐の獅子吼えの下、欣然と穴掘り作業に出ていった。ジャングル内の宿舎バラックから毎朝、小隊を引率して標高千メートルの峠にのぼり、トラック道路にそって延々と伸びる岩穴をくりぬいてゆく作業の指揮をとった。巡察に往復三時間を要する懸崖である。銃砲眼の強固な複郭陣地が完成すれば、下方敵方からは全く見えない。紆余曲折のもっとも多い地形で、山の岩盤トンネルを上方から下方へくりぬいて行く作業は困難をきわめた。

第一中隊は小隊ごとに、標高七～九百メートルの間にそれぞれ二キロほどの距離を保って掘り進め、第二中隊は下手、標高四百メートル付近を構築していたが、かなり仕事がすすんでいた。

私は、前任の上官や部下に頭がさがる思いであった。彼らは私が到着する二カ月まえにこの作業に着手し、すでに二十四時間三交替で猛進撃をつづけていたのだ。しんどい作業だなどと、今頃出てきて文句の言えるすじあいではない。

作業は肉弾突貫に近いものであった。ダイナマイトを使用して発破はかけるものの、十字鍬や斧を使う原始的な方法で岩盤を掘り起こしていくのだから容易なことではない。電気ドリルでもあればと歯嚙みする。土木機械ではなく軍人精神で「岩をも通す」ということだろうか。

もちろん、現地人苦力も雇っていた。彼らを鞭でたたいて作業に駆り立てるという方法は避けた。満州の苦力をつかうようなわけにはいかなかった。暴力をふるって督戦すれば、かえって仕事の手を抜き、明日から出てこないことになる。猫の手もほしい掘削作業では、山獄人の技術を本能的に会得していると思われるトラジャ族の後裔を無視できないのであった。私たちは彼らをおだてあげ、軍票の札びらを切って、普通労働者以上の待遇をこころがけた。商業の町といわれるランテパオの現地人もやはり現金収入が必要であったろう。

兵士たちは、むしろ苦力より安い給料で働いていたといえよう。タダでも働かなければならなかった。いつもながら、苦難の矢おもてに立たされるのは兵士たちで、命令とはいえ、黙々と肉弾作業に挺身していた。

軍隊の土木工事は、日本国内の地獄的な奴隷労働の仕組みとして言い伝えられる

「タコ部屋」などの比ではない。そこは逃げも隠れもできない最悪の現実で、しかも、結果的にはトラジャ族の「墓所」とおなじことになるであろう運命を持ちながら、毎日毎日、命をかけて労働に服していたのだということが、私にもはっきり飲み込めるようになった。

私たちは目的を達成するために、団結を強め、私的制裁のない和気あいあいの内務をこころがけた。ジャングル内のバラックは兵営であり、勤務以外の兵営生活は軍隊内務であったが、「タコ部屋」以上の苦しみとは、人事の問題からではなく、ジャングル内の生物が私たちの首をしめつけてくることにあった。わたしはこんな恐ろしい世界に住んだことがない。

このジャングルは、樹齢何百年ともしれぬ巨木の、六・七十メートルの梢と地表とのあいだに、灌木、藤、かつら、笹竹、いばら、あらゆる宿木、蔦草がからみつき、クモの巣のように張り巡らされている。そこへ侵入するためには、斧、鉋、鎌などを使って切り払い、切り倒しながら、一步前進したとしてもそれは人間一人分だけ縦の空間ができるくらいのもので、もう、目の前は縦横無尽にからみつき繁茂した陰湿で妖怪めいた暗黒が立ちはだかっているのだ。機密上、外部から秘匿するためにわざわざ選んだということであった。魔のジャングルには、私たちをおびやかす無数の動物が棲んでいた。日暮れになると、翼が一メートルもある大コーモリが編隊をくんで宿舎の周辺に不気味な羽音をたててとびたつた。残飯のにおいを嗅いでイノシシが出没した。黄色い縦じまで長さ二、三メートルもある青ヘビや、緑色の保護色で木の枝そっくりに見える三角頭の青ヘビを何度も見た。宿舎を建てた当初はサルの大群が棲んでいたが、ダイナマイトの発破におびえて今は姿を消したということである。

白黒まだらで尻をぴくぴく上げる特大やぶ蚊の大群は、ぶーん、ぶーんと夜昼問わずひしめいていて、蚊やりの煙をいぶしても気安めにしかならない。しかし、蚊よりももっと不気味で執拗貪欲な山ビルには悩まされどおしであった。日本の蛭なら水田や小川で吸いつかれても、ちょっと痒くなる程度のものであったが、ここの山ビルはすさまじい。大きさも内地の蛭の二、三倍はあった。昼夜のべつなく、水陸に関係なく、ジャングル内のあらゆる場所に棲息して、人間の姿をみるやいなや頭上の梢から飛びつき、地上からは音もなく気配も感じさせず尺取虫の歩行ではいあがり、身体のあらゆる隙間から忍び込んだ。

この天才的な忍者には手のほどこしようもなかった。人間がひとり、地面にもの二、三分もすわっていると、どこにいたのか、いつからうかがっていたのか、匂いでサッと集まるのか、周囲から十数匹の山ビルが肉迫突進してくるのであった。気がついたときは吸いつかれた皮膚のきずぐちにえぐられたような穴があいており、血糊がべっとりとついている。バラック内では、昼間の激務に疲れて泥のようなねむりをむさぼっているあいだも、山ビルの侵入をふせぐために嚴重な武装を怠らない。暑苦しいのも我慢して、頭から足先まで衣服を二重三重にまとい、巻脚絆に軍靴まではいて寝た兵

士もあったが、朝起きてみると完全に侵されている。首筋、足先はもちろんのこと、背中や腹まで吸われて血だらけに膨れ上がっている始末なのだ。厚かましく貪欲な吸血鬼は、靴下の編み目から体半分をつっこんで、死に物狂いになって血をすっている。編み目の内と外の両側が吸血のためにまるまるとふくれ、そのためにどちらへも出られなくなってぶら下がっているひごいやつもあった。

私たちには山ビルを駆除するための薬品もなく、防御の方法もなかった。いわば、テキの蹂躪にまかし、血をすって絶対にはなれまいとしがみついているやつを自分の皮膚からむしりとり、ひねりつぶすより仕方がなかった。朝、起床と同時にすっ裸になって山ビル退治。これが朝食までの日課であった。それにしても、敵中深く侵入して殺されるまで血を吸いつづける山ビルの生命力とは何ものであろうか。

その他、二十センチもあるムカデや、エビガニに似た淡赤褐色の大サソリの奇襲もあった。ジャングルの日陰に生育する奇怪な熱帯植物の形態が、すでに妖気をただよわせている環境に私たちは耐えるだけでなく、征服し、岩盤に銃砲眼をくりぬいて要塞を完成させ、その後の戦闘にそなえて、あくまでも頑健な体を保持していかねばならなかった。

ときどき、雷鳴をとまなうすさまじいスコールが吹きすぎた。びしょぬれになった衣服は太陽のきらめく数時間で乾かすようにしていたが、他の洗濯物とともにバラック内へ持ち込まなければ間に合わなかった。夜は炭火で乾かしたが、狭い居室はいつも洗濯物でいっぱいであった。薄暗いバラック内に半乾きの衣類が終日ぶらさがっているためか、石鹼や汗の悪臭充満する壁や床からカビが密生してきた。床下から毒茸がもくもくと頭を持ち上げ、気がつくとき大きな傘をひろげた毒茸が枕元でわらっていた。快適で文化的な宿舎をねがっている私たちに、ここは「化け物屋敷」となり、「山ビル陣地」となってしまったのである。

それでも救いが全くなかったわけではない。重労働に適した給養に不足はなかった。労働者たちの愛用している南洋春菊を現地人の耕作地から安く手に入れることができたし、椰子、パイナップル、バナナなどの果実にもことかかなかった。仲良しになったトラジャ族労働者がある日、ドリアンの贈り物をもってきてから、兵士たちはドリアンの味覚にとりつかれてしまった。ドリアンの実は子供の頭大で外皮は鋭いトゲで武装している。それを斧で叩き割ると内部に白い果肉をまとった実(種子)がいくつも収まっている。五人ほどがドリアン一個を車座でかこみ、満悦の表情で一つ一つ指先でつまんで口にいれる。あたりは濃厚な悪臭に充ち、とても食えるようなものではないが、慣れ親しむにつれて「くだものの王様」になってしまうのである。シュークリームを凝縮してさらに濃密にしたような独特の味を覚えた者は、完全にドリアンの虜になった。

魔のジャングルでひとつだけ私たちをなぐさめてくれたのは、愛くるしい小鳥たちであった。払暁のひとつときではあったが、おびたしい小鳥の鳴き声が一斉におこり、私た

ちを目覚めさせた。それは樂園の天使たちの、暁の合唱であった。もし、山ビルややぶ蚊に悩まされることがなかったら、暁の目覚めは天国にいる思いをさせたであろう。だが、南セレベスのじゃんぐるは、悪魔と天使の調和によって自然が保たれているにすぎない。人間のわがままだかが許されるわけではないのである。

私はこれまで大竹少佐をおそれていたが、しだいに人柄がわかってくると、人情に厚い、部下思いの苦労人であった。頭ごなしにどなるカミナリだけで人物を判定するのは、まちがいでであると気がついた。突貫作業の熾烈な条件や自然の災忌を我慢すれば、私は上官、同僚、部下、ともに満足すべき人間関係を得たといえるだろう。私は一層奮起して、任務に邁進した。

## ドンガラへの出動

五月下旬、中隊に性病患者が三名出て、野戦病院送りとなった。

トラジャ族の女の姿が、ときどき工事現場に見受けられた。労務員の女房が連絡にきているのだろうくらいに考えていたが、これは夕闇にまぎれて侵入する南方夜鷹であった。月の出を待って鳴く、手斧で木を削るような、チョン、チョンと奇怪な声で鳴く鳥を、私たちは南方夜鷹と呼んでいたが、兵士たちを誘惑する夜鷹は、ムシロをかかえて山嶽に出没するトラジャ族の女であった。

彼女たち数名を岩の割れ目から発見して、工事現場から追放したが、いつまた飛んでくるかわからない。夜鷹が猛毒をもっていることは被害者兵士の症状が証明しており、皆を震え上がらせた。三人はいずれも悪性の梅毒を移されたのであったが、なかの一人は局部が腐れただれて、燃えつきるローソクのように落ちてしまうという、通称ローソク性病にかかっていた。南洋現地人の性病はおそろしいと聞いていたが、中隊からそんな患者が出たとなると、きびしく取り締まらないわけにはいかない。

大竹大隊長が意外に話せる人情家であったことはこの事件でも証明された。大隊長は三人の兵士を営倉に入れるようなことはしなかった。手遅れにならぬよう急遽入院させたばかりでなく、なんと、正規の慰安所を工事現場付近に開設したのである。

慰安婦希望のトラジャ娘を募集し、軍医の厳重な健診に合格した健康美グラマー八名に、清潔なブラウスとサロンを支給し、個室のあるバラック慰安所を開設した。兵士たちには休養日交替の外出をさせる、という温情を示したのであった。

二百名の兵隊に八名の慰安婦ではどうにもならないが、妖怪ジャングルと山ビル陣地に閉口していた働き盛りの男たちに、花の匂いと色彩を点描したかのような情緒とうるおいをあたえたのは大隊長の識見といえるものであろう。兵士たちが一段と仕事

の能率をあげ、生き生きと作業に励んだのは申すまでもあるまい。

私は熱低性マラリアが再発して、ランテパオ野戦病院に入院した。快適な病院ぐらしは山ビル陣地の生活にくらべると雲泥の違いがあった。三カ月の入院加療を軍医につげられたとき、正直、救われたと思った。ところが、四、五日たつて熱がひくと、あの恐ろしいジャングルと苦しい岩盤作業へ戻りたくてたまらなくなった。無性に、大隊長や上官や部下たちが恋しかった。どんな都といえども我が部隊に勝るものはない。今でも不思議に思うが、一日たりとも病院の孤独な、無聊な生活に耐えられなくなり、一週間後には軍医に懇願して山へもどってしまったのである。断っておくが、公認夜鷹とは関係がない。

六月、軍司令官の巡視があった。新任司令官・豊島中将である。豊島閣下は、阿南大将、飯村中将ににつぐ三代目の第二方面軍司令官であった。西部ニューギニア各地で転戦苦闘の経歴をもつ將軍は、私たちの演習を視察後、短い訓示をのこして立ち去ったが、阿南大将におとらぬ立派な人柄に見えた。私は豊島中将の訓示中、中将の堂々たる風格に阿南大将の姿をダブらせていた。阿南大将は四月七日に成立した鈴木貫太郎内閣の陸相になっているとであった。最も困難な時期に、全陸軍を背負って立つ現陸軍大臣が私たちの司令官であったと思うと、頼もしくもあり誇らしくもあった。阿南大将ならかつての部下であるセレベスの将兵を見捨てはしまい。

飯村新司令官の私たちに対する熱烈な信望と温かいねぎらいの言葉に感奮して、作業はさらにはかどった。岩盤トンネルは九十九パーセント完成した。敵が攻撃してくる前に、粗削りとはいえ難攻不落の銃砲眼要塞(と私たちが豪語するところの)が出来上がったのだ。あとは敵待ちの休暇が与えられ、体力を回復して戦闘に備える、という順序になるだろう。高潮に達した作業は、錐やツルハシなどの器具を使いながらも、あと一步の仕上げにむかって邁進した。

しかし、七月上旬、完成を前にして突然、寝耳に水の作戦命令が阿部中隊に降った。私たちは啞然とした。命令の趣旨は次のごときものであった。

「情報によれば中部セレベス西岸ドンガラ地区に敵米軍二千上陸潜伏の様相なり。阿部中尉は中隊をを指揮し、四十八時間以内に出発準備を完了するとともに、ドンガラへ急行し、付近一帯の搜索にあたり、敵上陸軍を撃滅すべし」

おそらく敵艦艇は近くの港へ迫っており、まず、斥候部隊をドンガラへ潜入させたのであろう。今までは空中からの偵察、爆撃であったが、小部隊といえどもセレベスの大地へ敵の足跡がきざまれた以上、それは反攻上陸の先駆けをなすものであり、いよいよ大激戦近づく判断してもあやまりではあるまい。私たちは奮い立ち、出撃の編成装備を整えながら、二日間は目の回るいそがしさであった。

中隊は十数名の病人を残留して、二百名足らずの兵力であったが、特別に通信一個分隊を配属された。また、大隊医療班主力に室軍医少尉を長とする衛生下士官二名、山崎衛生上等兵他数名の衛生兵を増加配属して、医療に万全を期する編成となった。

医療班の増強は中隊にとって心強いが、それだけ戦死傷者の確率が高い激戦を予想しないわけにはいかない。第一小隊長の雨宮少尉が軍司令部へ転じたので、私は出動中隊の前任小隊長となった。責任は重い。

準備完了し、明朝出撃となった将校宿舎で、戦陣にいでたつ昔の武将の心境で端座していた。不安がふっと胸をかすめた。

この編成装備で敵を撃滅できるのだろうか、という指揮者の責任が問いかける疑いの声であった。装備は、各人の所有する三八式歩兵銃と手榴弾二十発、小隊ごとに歩兵砲一門、重機関銃二丁、擲弾筒四の装備であるが心細いのだ。歩兵砲と重機は、緒戦に敵から分捕ったものであったが、点検の結果は、故障がおおく照準不良のしろものである。弾薬も少なかった。このような装備で中隊二百名が、十倍の敵二千名を撃滅しなければならない。ほんとにやれるかね、と言いたくなる。

兵士たちは進級があったばかりで、二つ星の一等兵から多くの新品上等兵が誕生していた。士気はまさに天を衝く、というのは出動命令の興奮からで、表面だけのことかもしれない。ほとんどの兵士が故国に妻子をもつ中年で、後顧に憂いある者たちといえよう。しかも、農耕兵あがりの軍歴一年では、はたして実戦に役立つかどうか。考えれば考えるほど「我に勝算なし」の悲観的な泥沼へひきずりこまれていくのであった。卑怯にも私は、大隊長の選択の誤りを糾弾するような心境になっていた。現役兵の若いバリバリが多い川辺第二中隊をなぜ起用しないのか。完成直前のトンネル作業を第二中隊にあたえ、なぜ、ロートル中隊の私たちを激戦地に送り込むのか。

しかし、私は自分の弱気を反省し、自分の厭戦気分をたしなめ、積極的な方向へ舵をとりなおした。昔の智謀にすぐれた武将は、装備の弱体を巧妙な戦術でカバーした。少数兵力で、何十倍もの敵を制圧した。戦国時代の合戦をいちいち数え上げるまでもない。日本の文字には「敗戦」がない。戦えばかならず勝ち、攻むればかならず取る。カミカゼはきつと吹く。一切の雑念をすてて肉弾突撃を敢行し、いざとなったら玉砕あるのみではないか。私はわたしなりに心を決した。

戦闘の勝敗をあれこれ考える雑念の底にとぐろを巻いているのはいつも「死」であった。これを克服してしまえば、残るのは行動しかないのである。後顧に憂いある部下たちは勇躍出動の準備を整えた。こころの中は複雑であろうが悲観的な言辞を弄するものは一人もいなかった。わたしは独身の次男坊であった。むしろ歩兵重機関銃出身の私にとって、この出動は千歳一隅の機会をあたえられたというべきであろう。初陣の新鮮ささえあるではないか。よろこんで散華しよう。

台湾編成以来の僚友小隊長、部下戦友たち何人かはすでに護国の鬼になっている。俺は君たちの仇を討ってやるぞ。

私は自分に言い聞かすと、すぐ床をとって寝た。何にも思わず、欣然と征途につき、ただ死力をつくして戦うのみである。

翌朝、私たちはトラック数台に分乗してランテパオを発った。私の小隊が先頭をきった。

まず、ポソをめざした。このコースをしっているのは中隊で私一人だけであり、マレー語をしゃべり、地理に明るいということで、先頭隊を命ぜられたのであった。

ポソから目的地まで約二百キロキロ(下関—熊本)の行程である。

夕刻、ポソに到着。一泊して港より機械船に乗り、夜間航行でパリギへ向かった。翌朝、パリギ到着。村民に敵情を聞いたが、誰一人知らなかった。これより隠密の態勢で夜行軍に移った。翌払暁、パリギ北方二十キロのトポリに到着。めざすドンガラは目と鼻の先であった。

中部セレベス東岸から西岸へ三十キロ、山嶽地帯を横断すると、ドンガラを含めたパール湾岸に着く。敵の潜伏地点が近いとなるとさすがに緊張してきた。

ここでもドンガラの様子をさぐったが、パール湾を往復する漁民でさえ何もしらなかった。通りがかりの者にも尋ねてみたが、すべてが知らぬ存ぜぬの一点張りで、むしろ、怪訝そうに「ドンガラに何かあるんですか」と、逆に問いかける者もいた。知っていながら隠しているともみえなかった。

私たちは、敵数は案外、情報よりずっとすくないのではないかと判断した。あるいは、人目につかぬよう夜陰にまぎれて侵入し、巧妙に分散、ジャングル内に潜りこんでいるかもしれない。こうなると直接ぶつかってみるより仕方がない。山越えでのドンガラ突入を決意し、戦闘体形をたてなおして行軍をはじめた。友軍の合言葉は「山と川」に決めた。

トポリから西方山嶽地帯にかけては、私も地理不案内であった。夜の山越えは不気味で、岩穴や木陰に敵が潜伏しているように思えてならなかった。地形・地物はゲリラの戦闘に適している。真っ先に歩いている私は、いきなり前方の岩穴から火焰放射器がふきだしてきそうな気がした。曲がり角にこんもり茂る黒い樹々が、敵の姿にみえたりした。小休止のあと私は尖兵分隊を選抜して、五十メートル先を進ませた。靴音を立てさせぬように草や蔦を靴に巻かせた。また、重機関銃を組み立てて、担いで行かせることにした。敵の猛射に備えて直ちに応戦できるよう、そして部下の士気を鼓舞するため、厳しく訓示をあたえた。臆病かもしれないがより慎重をこころがけるようにした。こんなところで全滅しては目もあてられない。

漆黒の山道を静々とのぼり、やがて、平坦な峠道にさしかかったところで、蜃気楼のように一軒の洋館が浮かび上がった。尖兵分隊長が引き返してきて、「あやしい家です。この辺はオランダ人の避暑地であったのだらうとおもわれます。こぎれいな洋館です」と私に告げた。

「よし、包囲する」わたしは、抜刀した。

第一小隊だけで忍び足に近づいて行った。屋内は灯火の気配がなかった。しかし、米軍が進駐したとすれば、絶好の避暑地として真っ先に占拠しそうな建物である。

おもて玄関に重機分隊を配置、小銃分隊を建物周辺に散開、私は軍刀を片手に表側の窓に近づいてそっと内部をうかがった。静かである。裏側へ向けた分隊の誰かがド

ラム缶か何かにけつまずいたのであろうか、ガラガラバツタンという音とともに、金属の容器らしいものが崩れおちる音が起こった。しまった、と私はその方向をふり返った。息をのむ一瞬、ふたたび静寂は戻ったが、窓にぼうっと灯火がゆれる。人がいる。私は拳銃をにぎりしめていた。

灯火はゆれながら表玄関の扉口へ移動している。私はさっと窓口からはなれ、二人の小銃手をを左右につけて、扉の横で身構えた。扉の開く音がしてカンテラを持った初老の土民の顔がのぞいた。私はぬっと前面へでていった。

「きやっ！」土民は仰天して叫び、その場にカンテラを投げ出してひざまづいた。大刀をにぎった日本軍将校と銃剣を突きつけた兵士の姿を見て、腰を抜かしたにちがいない。その初老の土民の目の前の草むらには、重機の筒先がにぶく光っていたのである。

左右の兵士が土民を引きずりあげた。私は「お前に危害を加えるものではない」とマレー語で言うと、彼は了解したようであった。しかしまだ動転していて口がきけない。わたしは単刀直入にたずねた。

「アメリカ、アダカ？（アメリカ人がいるか？）」

「テ、テ、テ、テーダ（い、い、い、いない）」

兵士の一人が、胸ぐらをつかめて詰め寄った。嘘をついたらゆるさんぞという威嚇である。彼はどもりながら答えた。

「アメリカ兵はいない。私はここのオランダ人の秘書をしていたが、今は私が住んでいる。召使が二名いるだけだ。どうぞどうぞ、中へは行ってみてください」

かれは次第に落ち着きをとりもどして、私たちを内部へ招き入れた。わたしは軍刀をおさめたが、拳銃だけは握りしめ、伝令の兵士たちも銃剣を構え筒にした姿勢で用心深く広間へは行って行った。たしかに召使いの二人のほか、人の気配はなかった。椰子油の灯火だが広間はあかあかと照らされ、主人は下にもおかぬ扱いで私たちをテーブルへ招いた。召使いが、うやうやしくコーヒーとバナナを運んできた。主人は陽気にしゃべりだし、「ニッポン、バグス（日本はすばらしい）」を連発した。

私たちはむろん、ゆっくりごちそうになっている気分ではなかった。気もそぞろに、ドンガラの敵情を尋ねてみた。主人はこんなことを言った。

「米軍の軍艦が来ているのかも知れない。ときどき、大砲のようなポン、ポンという音が海岸のほうです」

すると、艦砲射撃が行われているのか。これが本当だとすると、ドンガラへ上陸したという情報も嘘ではあるまい。私の胸に不安がはした。（こいつ、日本におべんちゃらを使うが、オランダ人の留守を護っているスパイではあるまいか。用心しないと米軍に通報されるかも知れんぞ）

阿部中隊長は、護衛の分隊をひきつれて広間へは行ってきた。私は主人からの情報を告げ、今後の行動について意見具申した。このあやしい一軒家には、下士官を長と

する数名の看視兵を残し、主人と召使い三名の行動を厳重に見張るよう言いつけて、即刻出発した。パル湾まで十キロの下山であった。

午前三時、村の入り口に達した。暗闇のなかで村へ入るのは、地理不案内の私たちには不利であった。椰子林道を横にそれ、丘のふもとで夜明けを待った。やぶ蚊に刺されながらの大休止である。五名の斥候兵だけをパル湾一帯へはしらせた。村へ入れば敵がいる、という緊張感で眠る気にもならず、やたらに蚊をパチパチたたきながらのながいながい夜明けであった。

帰ってきた斥候の報告は以外であった。「敵は一兵も上陸しておりません」

張り切っていただけに、私たちは拍子抜けがした。しかし、数度の艦砲射撃は事実のようであった。私たちはもう、怖れることなく村へ入っていった。昼ごろ、涼しい場所をえらんで昼食、休止をした。村は平穏である。旧オランダ屋敷も、留守居の土民も、スパイなどではなかった。私は、柳を幽霊と見て戦争の幻影におびえただけであった。さらに真相をたしかめる目的で、ドンガラとその付近へ数組の斥候を派遣した。残った者には昼寝を命じた。すこし、バカバカしくなってきたのである。

午前中に、爆音がきこえた。。薄目をひらいてみると、高度三、四千メートル上空を、敵戦爆連合約五十機が、ゆうゆうと東から西へ飛んでいるところであった。兵士たちはガバツと飛び起き、くぼ地にふせた。私だけが仰向けに寝転んでいた。経験でわかるのだが、敵は私たちに爆弾を落とす気はない。あわてる必要はなかった。兵士たちは、一度も被爆の経験がないらしかった。分隊長は私ににじり寄って言った。

「隊長殿、空襲です。どうしますか」

「うるさい、全員昼寝をしとれ」

斥候が帰るまでに、じゅうぶん疲労が癒やされた。オランダ洋館からの看視兵も戻ってきた。斥候の報告で、パル湾岸およびドンガラ付近には、敵のテの字もないことがさらに明らかとなった。

その結果、ことの真相らしきものがうかびあがってきた。ドンガラ西海岸に駐屯していた海軍の小隊が、敵軍艦の艦砲射撃を数度にわたって受け、近く上陸必至とみてジャングル地帯へ難をさけ、第二方面軍司令部へ無線を打った。地上戦闘は陸軍へお願いしたい、というわけであろう。私たちは全滅覚悟で悲壮な夜行軍をつづけてきたのである。開いた口がふさがらなけった。大山鳴動して鼠一匹もせず、の空騒ぎらしい。

敵兵二千名というのは、腰抜け海軍小隊の見た恐怖の幻影であろうか。上陸して、ジャングルへ潜伏したのは、敵兵ではなく彼等なのである。拍子抜けと同時に、私たちは怒り、また、絵に描いた「米軍との死闘」に笑いころげた。

もっとも、このたびの出動命令をよく反芻してみると、一個中隊に「情報」の真偽をたずため「偵察」がどうやら真相のようだ。軍司令部も、なんとなく眉唾ものの情報と感じ取っていたのではなかろうか。しかしながら、私たちはもう少しばかり生き延び

たことを、内心ヒヤリと受け止めていた。

嘘とまことが織り合いながら、次第に彼我激突の時機が熟していることにはかわりがなかった。敵の上陸はいつまでも架空のはなしのままではない。阿部中尉は現地の状況を軍司令部へ打電した。応答はすぐに来た。「阿部中隊はパル湾に位置し、別命あるまでドンガラ付近の守備に任ずべし」

## 艦砲射撃

中隊はパル湾に定着して、警備、情報蒐集を中心とする守備隊の任務についた。中隊本部はパル村に位置し、第二小隊(小隊長谷口見習士官)、通信隊、医療班が所属した。私を長とする第一小隊は、湾の中間部に位置するタエリ村に駐屯。湾口のドンガラ守備は第三小隊(小隊長福竹准尉)である。

艦砲射撃に見舞われたドンガラは、敵上陸地点として最も危険な目標とされる。そこへ第三小隊を配置したのは、かつて中国戦線で武勲をたてた歴戦の勇士・福竹准尉を信望したがためである。

しかし、ドンガラはタエリから対岸距離二十キロで、良く晴れた日は湾口の目立つ建物が肉眼でも遠望できた。いざ敵の上陸となれば第一線の激戦地となることは、タエリといえどもドンガラと変わるまい。パル湾の海岸線はタエリからは見えなかった。私は海岸線に分哨をだして、湾内の偵察と土民よりの情報蒐集に万全を期した。

艦砲射撃に恐れをなした現地民は、ほとんど山中へ避難し、ドンガラ付近の村々は閑散としていた。私は小隊全員が宿泊できる空き家を見つけて、風通しのよいベランダを兵室とした。揚げ床住居の広く深い床下に弾薬を隠しておいた。宿舍の周辺は歩哨線を何重にもめぐらし、徐々に銃座や散兵線を築いていった。

ときどき B-24 の大編隊が頭上をかすめ去った。約二千メートルの高度で、東方の山脈上に次から次と四発の威容をあらわし、約五十機ほどの編隊でタエリ上空を制圧し、ドンガラ岬を通過して南西海上へ飛び去るのがならわしであった。たまには二、三機の小編隊でとびさるものもあった。私は、機体から黒煙をなびかせながら、両側を僚機に護られて必死に逃げ帰っていく敵機を、何度か見たことがある。

情報によると、セレベス島西方五百キロのボルネオ島東岸バリックパパンに敵豪州軍が上陸した。ここは、東南アジアではスマトラのパレンバンに次ぐ油田地帯であるが、豪州軍の上陸は日本軍の血液ともいえる石油を止めるための作戦で、米軍の援護爆撃が盛んに行われているというのである。したがって、米軍の主力が次の段階としてセレベス反攻上陸作戦を考えていることは確実と思われる。いまのところ、敵軍の台風の目はフィリピンにある。セレベスへの移行は、バリックパパン占領後に集中

してくるとみてよい。

しかし、今は敵がセレベス島を横目で見て通りすぎている段階であっても、ここドンガラ付近に日本軍の通信隊が無線機を扱いながら潜伏しているという事実を黙認するはずがない。ボルネオで日本軍に撃破された米軍重爆撃機がドンガラに不時着した形跡もあった。パルに駐屯して数日後には私にもさまざまな情報が入ってきた。すなわち、セレベスが激戦の台風の目となるのはフィリピンおよびボルネオなどの戦況の推移にかかっているとしても、無線通信隊が盤踞する(と敵がみなす)ドンガラ地区だけでも徹底的に叩く日はそう遠くないはずである。あるいは明日、いや、今夜であるかも知れない。

そのさきがけともいうべき威嚇爆弾が一発、パル村におとされた。五十機以上の B-24 編隊が例によってタエリの上空を通過した。その編隊の最後尾の一機が、ドンガラを通過したとみるや、不意に反転、パルの上空から大型爆弾を投下して意気揚々と飛び去ったのであった。おそらく、中隊本部の通信隊の無線をキャッチしたにちがいない。私は伝令の渡辺上等兵をつれて、急遽パル村の中隊本部へおもむいた。二十キロ近い行程を二人はほとんど駆け足でとおした。

中隊本部は無事であった。敵の爆撃は威嚇にすぎなかった。本部の宿舎は椰子林にかこまれていた。上空からの盲爆であり、中隊の位置や兵力をかぎつけられていたわけでもない。大型爆弾は付近の椰子をなぎたおしただけであった。しかし、私たちは帰路、数キロの砂浜を歩いて、前方の椰子林に入ろうとした直前に、敵の大型飛行艇に襲われた。

前方椰子林の梢すれすれに超低空で襲いかかった空の怪獣じみた飛行艇に、私は風防ガラスからこちらをにらんでいる米兵二人の顔をはっきり見た。万事休す。渡辺を退避させるために突き飛ばし、敵機の反対側へ回転して椰子の幹へすがりついた。蜂の巣のように機銃掃射をあびる一瞬を覚悟して歯をくいしばったが、爆風を吹き付け、激しい轟音を残したまま飛行艇は頭上を通過した。奇跡というよりない。私と渡辺はかま首を持ち上げ、ちょっと顔を見合わせただけで、呆けたように飛行艇の行方を目で追っていた。それからゆっくり、顔や体をなでまわした。

翌日、阿部中隊長じきじき私の小隊へ連絡にきた。新しい情報はいった。「敵軍艦三隻、湾口から突入してきた」というのである。いずれにせよ、パル村付近に飛行艇が出没する情勢も考えあわせ、具体的な戦闘準備をしなければならなかった。阿部中尉が宿舎前に小隊全員を集めて、戦闘時の注意事項をあたえている最中に、爆音が聞こえた。

B-24 の編隊だが、いつもと様子がちがっていた。数機が低空の態勢に入る。「これはあぶない」と阿部中尉に耳打ちし、私は、全員に退避を命じた。

「空襲！全員ベランダの下へ潜れ」。

わたしの勘であったが、部隊の所在をつきとめられたら爆弾の餌食にされる。姿を見

せないことが先決であった。私は強引に中隊長をうながし、兵士たちとともに縁の下へもぐりこんだ。もぐらもちの感覚で床下の土にひれ伏し、首をもたげて偵察すると、まぶしい逆光で真っ黒な敵機がグワツとのしかかってくるのが見えた。どうやらグラマンらしかった。すさまじい爆音は頭上へ舞い上がり、第一波、第二波の小編隊が襲い掛かって、また遠ざかる。日本兵を見つけたが最後、皆殺しのつもりで低空探索していると知れた。耳を聳する爆音の中断ない肉迫におびえて、二、三人の兵士が、本能的に逃げ出そうとして土を掻き匍匐した。

「どこへ行くか！」私は叱咤した。

「洗濯物をかたづけに行きます。白いので目標になります」と、兵士は弁解したが、より安全な場所へ逃げ出そうという動物的恐怖に襲われているのはいるのは明らかであった。

「待て、出るな。出ると危ない。バカ！」

私は引き留めたが、内心ヒヤリとした。洗濯物がどれだけ干してあるのか、気がつかなかった。それより、この床下が小隊の仮設弾薬庫であることを思い出したのである。一発の爆弾が落ちれば、家は炎を発し、床下の弾薬ははじけ飛び、宿舎は阿鼻叫喚の巷となる。いや、一瞬後は黒焦げの死体と化すであろう。しかし、私は自分の勘と命令措置の適切を信じた。すべて戦場は賭けでしかない。白い洗濯物が目標となって全滅するか、床下弾薬庫の危険な退避が敵機目をくらますか。かんじんなことは、気球に際して逆上しないことである。

この場合は、私の賭けは勝った。私たちは見つからずに済んだ。敵機は反復搜索をあきらめ、爆音は湾の対岸方向へ遠ざかった。「空襲解除」の号令で、何事もない光さわやかな屋外に出て行くと、私は洗濯物の取りかたづけを命じた。洗濯物は屋外にもベランダにも吊るしてあったが、敵の目標になるほどの分量ではなかった。それが目標になるなら、宿舎そのものが照準されるはずであった。

そのとき、海岸の監視哨から伝令が来た。伝令の顔は真っ青であった。

「敵軍艦三隻、沖合三百メートル、ただいま湾内へ進行中でありませう。甲板上にアメリカ兵多数、砲口をこちらに向けております」。

艦種はさだかではないが、大型潜水艦らしかった。私はとりあえず、小隊に戦闘準備を命じた。

「中隊長殿、小隊はこれより海岸線へ急行し、敵を殲滅いたします」と、私は興奮して言った。

「まあ、待て」阿部中尉は若い少尉の猛り立つ姿を頼もしげに眺めながら微笑した。

「俺が行く。状況判断の結果、命令を伝えよう。貴官はここで待機しておれ」

「はいっ」

事実私は、敵機も軍艦も木っ端みじんにしてやりたいような、敵意に煮えくりかえっていたのである。だが、中隊長が海岸へ走りだそうとする前に、突然、轟震動が天地を

ゆるがした。瞬間、敵の空海総攻撃が開始されたのだと思った。耳をつんざく轟音にキモをつぶし、私たちは呆然と立ちすくんでいた。艦砲の照準点はドンガラらしい。小隊だけの福竹分屯隊はどうなったか。中隊長は言った。「これよりドンガラへ向かう。第一小隊は続け！」

敵は、撃って、撃って、撃ちまくった。一秒も音の絶えることはなかった。天地をくつがえす轟音、炸裂音はゆうに一時間以上絶え間なく続いた。敵は物量を使い果たし、砲身が焼けただれまで撃ちまくるつもりか。福竹小隊は木っ端みじん、ドンガラは火の海と化しているであろう。私たちはその敵を撃滅するために走っているのがあった。

いまから思えば、心理的なパニック状態におかれていたのであろうが、膨大な物量と威力に充ちた艦砲をもって遮二無二打ち向かう米軍の機械化精鋭に対し、百名たらずの私たちは重機一丁と豆鉄砲ていどの小銃を持って、憎むべき敵を殲滅せんものと本気で考えていたのである。灯ろうの斧どころではない。滑稽とも悲惨とも空しいとも言いようのない戦闘ながら、私たちが叩き込まれていた不敗の大和魂と肉弾特攻の精神は、ただ散華するためにだけ命の火を燃やしつづけたと言えよう。死力を尽くしてたたかうものにとって、全滅も玉砕も名誉であった。

福竹小隊は艦砲射撃を受ける直前に山麓に避難していて、全員無事であった。敵は、終始浮上したままの大型潜水艦二隻と大型魚雷艇の計三隻であった。ドンガラ村は粉碎され焼け野原になっていたが、私はついに敵船影を見なかった。全物量を消耗し、砲銃弾を打ち尽くして後の上陸、と判断したのはあやまりであった。敵ははじめから上陸の意思はなく、艦砲射撃もまた、ほんの小手しらべ程度の威嚇に過ぎなかったらしい。もはや、海底ふかく没し去ったあとであった。

敵の爆撃に際し、私たちは一発の応酬もすることなく退避し、艦砲射撃ではいち早く安全地帯に逃げ込んだ福竹小隊のように、現実の戦闘でははっきりと敵の優勢を認識してそのような行動をとってきながら、いざとなれば敵を撃滅できると信じていたのだから不思議である。

このドンガラの艦砲射撃は私が遭遇した最初にして最後の艦砲射撃であった。それ以外のセレベス島のあらゆる地点で、敵の不時着機とか敵兵潜入とか、それに類する情報をきいたことはない。

海上からの攻撃もなく、敵機の襲来も途絶えると、住むには快適なパル湾岸地区でいつまでも守備の任務についていたかった。しかし、昭和二十年八月初旬、軍司令部命令がきた。「現守備地区を撤収し、ランテパオ高原へ帰還すべし」

ただし、軍命令の主眼は、パル湾よりランテパオまでの行程にあった。元来た道を一気にトラックで戻るのではない。パル湾沿いに山岳地帯を縦断南下して、人跡未踏の土地を綿密に調査することになった。今後、ランテパオ高原要塞に軍主力が立てこもって敵上陸部隊を迎え撃つことになる場合にそなえ、奥地山嶽地帯を詳細に知っておく必要がある。そこで自分の足でたしかめた地誌の作製を阿部中尉に命じたわけ

である。さっそく、中隊長と私たち幹部は、教材用地図と私製略図を囲んで、連日、首っ引きで探検コースを検討した。

各人がそれぞれパル湾よりランテパオまでの私製略図を作製、探検途中で詳細を書き込んで、ランテパオ帰還後に突き合わせて総合地図を作ることにした。作戦上の参考記事は、各人の自由な発想により、できるだけ詳しいリポートを作製すること。

幹部会議をつづけているうちに、兵要地誌的な興味より、作戦の熱気が私たちを包みこんだ。そして、いかにこの任務が重大なものであるかを納得して行った。要塞を中心とする彼我の攻防戦かあら、奥地の山岳戦を想定し、さらに永久ゲリラ戦の展望におよんだとき、私たちは口角泡を飛ばして激論を戦わせていた。気がついて大笑いになった。私たちの任務は、いわゆる軍事探検中隊をはみだす必要はなく、その能力もあり得ないにもかかわらず、すっかり、軍の作戦参謀気取りになっていたからである。行軍針路をパル川から上流へ向かうとして、土民の情報を集めてみたが地理上の明瞭な知識を得ることはできなかった。パル川を十日ほどさかのぼるあいだに、二、三に大きな村があるが、次から次と人種が変わり、互いに反目していて交流はなく、奥地の様子など何も知らない。山越えが可能かどうか確答はできない、というのである。したがって、実際に踏査してみないことには、ランテパオ高原に首尾よくぬけられるかどうかもわからないし、所用日数も全然見当がつかなかった。

しかし、この作戦の目的は先頭ではなかった。戦う相手は「自然」であった。道なき道を歩き、高い山が目の前であれば登る。未知に挑む、という冒険心が私たちを励ました。心配なのはマalaria患者をはじめ十名ほどの練兵休兵士であるが、どうしても連れて行ってくれという。軍医の判断で医療班を強化し、病人分隊を編成した。

ロダを雇い、重火器と弾薬を積み込んだ。ロダには落伍する病人を收容する余裕をとり、万般の準備をととのえた。行程を一カ月と概算して米、缶詰類もロダに積んだ。まさかのときは無線機がものをいう。

命令受領から三日目の朝、未知の峻険に挑む澆刺とした中隊全員は、パル村中隊本部に終結、阿部中尉の号令のもと、歩調も軽く出発した。パル川沿いにリンズ湖を左に見て、南へ南へとさかのぼって行った。

## 地獄の山と川

最初に宿営したのは、カラワラという村であった。山麓平原にあって田畑も豊饒、民家も百軒ほどあってなかなか大きな村である。私は早くから寝た。地図書き込みと周辺地形、村人の生態など参考資料の作成で疲れた。深夜、ふと目覚めたとき、陽気な人々の歌声や話し声に混じって、鐘、笛、太鼓などのひびきが潮騒のように聞こえて

いた。村の祭りか何かで、日本の盆踊りのようなものがはじまっているらしい。兵士たちも見物にでかけた模様だが、わたしはそのまま眠りに落ちた。村の騒ぎは明け方まで続いた。

翌朝、一晩中のお祭り騒ぎは日本軍歓迎のためであったということである。村長は村人にお触れをだし、総出動の歓迎の宴を張った。招かれた兵士たちは、集会所で椰子酒や鶏のカレー料理などをふるまわれ、舞台の唄や踊りを見物しただけでなく、軍歌などを合唱してきかせ、あげくのはては広場のキャンプファイアーさながらの集會に参加した。踊りはルンバダンス調の土人踊りで、男女が向かい合って手足を振るだけだが、手で叩く太鼓と笛、鐘などの単調なリズムに合わせて兵士たちも時を忘れておどり狂ったという。

村の娘たちが、いまだ見たこともなかった日本軍兵士に警戒の色もしめさず、ダンスの相手をしたばかりでなく、兵士の誘いに応じて椰子林の暗がりに潜りこんだというのは、室軍医の誇張があるとしても、奇怪な村というよりない。

「しまった、俺もいけばよかった」と、私はおどけ羨ましそうな顔をして見せたが、到着早々、村人がおそれる色もなく歓迎の色を見せたことは事実であった。オランダの白人を追っ払った日本軍を、同じアジア人として彼らは歓迎しているのであろうか。大東亜共栄圏の皇道宣布がこんな奥地まで浸透しているとは思われなかった。不思議なことである。

不思議であるが、歓迎されることは悪いことではない。私は日本のアジア人にたいする使命のようなものを感じて、かなり英雄的な気分になった。そして私たちが略奪や暴行をしたのではなく、和気藹々の裡に現地人と交歓し、むしろ南国のロマンティズムを満喫した兵士たちに、私は若い嫉妬を感じたりした。彼らは羽目をはずしたように見えながら、軍規は厳正であったという。

次の村「ナモ」でも歓迎された。村長はお祭り用の白色水牛を屠って、私たちの宿舎へ献じた。ナモでは新しい優秀なロダを所望したが、快く調達できた。まだ、山嶽地帯の入り口にも達していなかったとはいえ、村むらがこのように歓迎してくれる。前途は幸運にめぐまれそうな気がしてくるのであった。

ナモの村を出はざると、パル川溪谷は次第にせばまり、標高三千メートルとおぼしい山々の峰が少しずつ動いてきて、私たちをとりかこむようであった。南下するに従い、村はひなびた姿で峡谷の間に点在し、住民の顔かたちも服装も変わってきた。山嶽人独特の風貌をおびてくる。

無人部落に一泊。標高一千メートルの峠からながめると、周囲を連山がひしめく壮大な風光で、はるか下方は青い三筋の川が合流する盆地に、ひとかたまりの家屋が椰子林と嶽林の枠のなかに浮き上がって見える。前進方向からみて、コロ川流域のワッカマ村と推測された。

ワッカマ村に着いたのは、出発後七日目であった。約二百キロ(鹿児島・熊本間位)

歩いている。峠越えの印象は、名古屋あたりから益田川沿いにさかのぼり、トンネル上の峠を越えて飛騨の高山まで降りてきたというべきか。ワッカム盆地の標高もちょうど飛騨の高山程度で、約五、六百メートル程度というところだ。ただし住民は山嶽人の土民で、百軒くらいのやや大きい村であったが、旅人の目を楽しませてくれる何の趣もない。村人の態度は、素朴で無関心、前二村のような歓迎ぶりは見えなかった。飛騨の高山あたりに来たという印象は、周囲にひしめく連山が二、三千メートル級の山嶺を空高く突き抜けている点、乗鞍、槍などの高峰を仰望するに似ていたからであった。しかし、私たちは観光のために高山(ワッカム)へ辿り着いたのでない。あの高峰を征服し、山嶽の戦略的調査をしつつ、目的地まで是が非でも突破しなければならない。一応、方向はさだめてあるとはいえ、いざ登山となると、どのすりばち型の縁から取りすがって進むか、見当がつかなかった。眺めは雄大で荘厳でさえあったが、登山となると峻険な悪魔の防壁めいて見える。これを一步一步征服し、踏み越え、峰々を巡って幾百里とも知れぬ未知の山道を歩いていかねばならないのだ。

村人に聞くと、これからの山道はロダが入れぬという。ワッカムの登山口が大きな関所であるこ

とさえ私たちは知らないできた。ロダの馭者は、自分の村へ引き返せるので喜んで

いる。私たちは茫然と立ちすくんだ。ロダがなくなれば、重機はもちろん、分解しても砲身だけで六、七十キロもある歩兵砲や、弾薬、糧秣を各人が分担して運ぶことになる。兵士は完全軍装のうえ、各人二十五キロ以上の荷物を分担しなければならない。病人は二十名に増えていた。

いかに地誌作成が目的とはいえ、重火器や弾薬を捨てていくことはゆるされなかった。山嶺を仰ぐと目がくらんだ。軽装で登山しても何カ月を要するか予断をゆるさない。米は二十日分しか残っていなかった。遭難、餓死も現実となるかもわからない。なおさら、病人たちを捨てていくわけにはいかなかった。泣いても笑っても、担いででも連れていかねばならなかった。山を目の前にして急に怖じ気立ったのはあまりに不甲斐ないと思われたが、ロダの通れぬ山道と云うのは、完全に私たちの気力を打ちのめした。

それでも皇軍に不可能はない。命令とあらば重畳の大雄峰でも貫徹しなければならない。中隊長以下部隊幹部は鳩首協議の結果、ロダにかわる強力山男の徴募を考えついた。私が村長にあって頑健な苦力数十名の雇い入れ方を懇請した。必死に食い下がった。拳銃でおどしてでも土下座してでもこちらの願いを聞かせるつもりであった。必ずしも日本軍を歓迎していない村長を口説くのは骨が折れた。私たちの窮状と必死の誠意は、村長の胸に通じたらしかった。

彼らの条件(人命の保証と報酬)を十二分にのんで、私たちはやっと二十名の山男を雇うことに成功した。

ロダに代る荷物運搬者はせめて五十名と踏んだが、これでも文句はいえない。私た

ちは二十名の土民苦力に重火器を分解して担がせ、弾薬・糧食をできるだけ兵士各人に分配して、翌朝早くワッカマ村を出発した。

山には、径のあるところから登りはじめた。小さい山の登り降りをくりかえしているうちに、径は急峻の坂となった。径は土民の踏み固めたものに違いあるまいが、人間一人がやっと歩ける程度の幅である。一列縦隊。中隊指揮班、苦力隊、第一、第二、第三小隊の建制順序で延々と連らなっていく。山は高く、径はどこまでも急峻であった。峠に達すると、径は谷間へ降りてゆく。峡谷沿いに径はなく、尾根たいに登って行くとまた峠に達した。そこからまた、急転直下の尾根伝いに降りて行く。尾根から峠へ、峠から尾根へ、峠—谷底の繰り返しである。堂々巡りをやっているように思われるが、谷底と峠の標高は歩くにしたがって高くなっている。谷底が七百、八百メートルと高くなると、次の峠は千、千五百メートルとなっていく。ぐんぐん登っていくことだけは確かなのであった。

一日に二回以上もあらわれる高い峠をふみこえ、また谷に降り、川をわたり、尾根伝いにのぼった。密林は深まり、とだえそうな薄暗い小径は湿っていて、前の者がすべって転倒する。急峻の坂の、いつ頂上に達するかと前方を仰ぎ見ながらのぼり、下りにつる草などにすがって、足をふんばる。尾根をぐるぐる迂回する。肩の重量がこたえはじめ、息をはずませ、汗をふきふき、一步一步進んでいく。その苦しみは「大鋸刃渡り、ぐるぐる回転の連山越え」と形容して、日誌に書きとめたくらいである。

救いは、暗くならぬうちに部落を発見して土民小屋へ倒れ込んで休息をとることだけであった。それでも、ワッカマ出発後五日目くらいまでは溪谷付近に二十軒ほどの小部落、四、五軒ほどのきこり小屋を見つけることができた。民家が完全にとだえた山中では、谷川近くで露営炊さんした。休息と食べることのほかは、なんの楽しみもなかった。

ついに小径もなくなった。断崖絶壁の下は樹林におおわれた深い奈落だが、その底から河川の轟がこだましてくると、谷間へ降りる見当をつけてジャングルを切り開き、道なき道を遮二無二押しわけて行った。川音が谷の目標であった。しかし、いざ降りてみると、その川がコロ川の支流なのか本流なのか見当がつかなくなる。谷川はあらゆる方向から流れ来て、延長三百キロといわれる本流にどこかで合流しているのであるが、大きな支流が五つもあると聞かされているだけで、目の前の激流が支流の一つであるのか本流であるのかさっぱり見分けがつかないのであった。

パル川をさかのぼっているときはどんなジャングル内に迷い込んでも、南から北へ流れている本流の音で自分の位置を確かめることが出来た。コロ川も、ワッカマ盆地出発時には、本流をさかのぼって行きさえすれば間違いないと村長に教えられたのだが、神出鬼没の川音、姿をみせるときも、音だけの時も、水流は前後左右にあり、合流地点でも本流と支流の見分けがつかない。(あとでわかったのだが、大きな支流の中主だった五つの支流は、各方面から本流に向かって直角に合流し、ドンガラ南方約

百キロの地点でウリアン川と名を変じてマカッサル海峡に流れ込んでいる。終始、ギザギザの岩礁だらけの大激流であり、中央セレベスの複雑な地形の創造者というのだから、当時の私たちに変幻自在の妖怪の姿を見せたのも無理はない)

こうなると、私たちははたしてロコ川をさかのぼっているのかどうかも、疑問になってくる。しかし私たちは、ただ一個の磁石をたよりに谷底の激流をわたり、山をふみこえて行かねばならなかった。私たちは原木の丸太を横倒しにして架けただけの仮端や、大揺れするおっかなびつくりの藤製吊り橋を二、三人ずつわたった。橋のない川は胸まで浸って浸ってわたり、深い川は速成の筏を組んで激流に棹さした。八月はまだ雨期である。小さい支流といえども激しい濁流となり、木々を噛んで渦巻き、両岸の樹木やシダを広く浸食して、凄絶荒涼たる熱帯原始の光景を呈していた。水浸しになってやっと岸に這い上がっても、そこにはまだ挑戦を続けなければならない山々がそびえていた。

一途に南下を信じ、目測で渡河に成功したと思って磁石をのぞくと、北を指していることがあった。山も川も妖怪である。がっかりして後ろをふり向くと、サアーツと風がたち、すさまじい勢いで雨が襲って来た。しかし、私たちは勇気を奮い起して歩きはじめる。未知の地形という妖怪にきりきり舞いさせられながら、ふたたび「四方八方東西南北対面の、大鋸刃渡り反復ぐるぐるまわり」の山に挑むよりないのであった。

かなり高い山を登ったり下ったりして、いくつかの峰を越えると、人の踏み固めた小径を発見した。近くに村落のある証拠である。峡谷を挟んで、連山の眺望が効く峠の一面、直射日光を受けた草原に、二つ、三つ、草ぶきの小屋があるのを、私たちはみとがめた。人の住む部落か、と期待して近づいた。縦横の原木丸太で作った不気味な掘立小屋で、のぞいてみると誰もいない。私たちは、山獄蛮族の監視小屋にちがいないと判断した。昔は首狩り、いまでは物品や奴隷の略奪に山を越えて侵入してくる他民族の攻撃に備え、防止、監視のために造った小屋と思われる。

いずれも無人であるのは、古来よりの他種族侵入・戦闘の歴史が、今は中絶している時代だからかも知れない。いずれにせよ、私たちが文明人の踏査したことのない未開の山獄地帯に分け入り、ついに原始蛮族と相まみえることになった事実を、複雑な気持ちで納得させられたのであった。監視小屋は、敵の歩哨線にひとしい。この関所の奥に蛮人部族が盤踞しているのは、まず確実とみてよかった。

私は、尖兵を七、八名選んで前に出し、付け剣、弾込めを命じた。蛮族は毒の矢を放ち、蛮刀をふるって攻撃をかけてこないともかぎらない。「人食い人種で、食われるかもしれんぞ」と、冗談まじりに言い渡した。「ただし、こちらから発砲してはならぬ」

矢張り部落はあった。家は一族がすんでいるらしい大きさと、四周どこにも窓がなく、外敵の侵入を防ぐかのように頑丈な荒丸太で武装されていた。しかし、私たちの接近に気づいて出てきた男は、おびえたように、あるいはめずらしいものでも発見したように家々に向かって奇声を発してよびかけたが、抵抗の姿勢はどこにも見えなかった。

私たちは家を遠巻きにして、銃剣を擬しており、重火器を携行した軍隊である。蛮族など怖れる必要はなかった。

ただ、向こうが驚いてめずらしそうに眺めているように、こちらも珍奇な蛮族の服装や顔かたちを、にやにやと鑑賞したにとどまった。少しちじれ毛の混じった短い黒髪と、彫の深い褐色の顔、するどい目つきはニューギニア系人であろうか。筋骨たくましく、ずんぐりして背は低く、裸体に木の皮でこしらえた禪一丁の姿であった。精悍だが、獐猛という印象ではない。

私は言葉が通じないのを承知の上で、「私たちは危害を加えにきたのではない。あの山を越えたいのだ。ここをとおしてほしい」とマレー語で言い、整然と隊列をつくって部落を通り抜けた。もちろん、何事もおこらなかった。さすがに薄気味悪く、かれらのなかに蛮刀を腰にさして一応の防御態勢をとっている者もいたので、宿営だけは思いとどまった。

また小径が続き、尾根伝いにぐるぐる歩いた。敵機がときどき頭上を通り越した。快晴のジャングル上空に急上昇していくP-38やB-24を見ることがあった。それは、次の瞬間、一条の飛行雲の尾をひいて、美しい流星のように消えた。

また、蜻蛉が向かい風に吹き流されていくように空をすべり、山の稜線へすいこまれて行く。私たちは山嶽上を飛行する敵機が爆弾を落とすことはあるまいとの確信から、平和時の美しい旅客機でも眺めるように目を細めた。それは、大空を羽ばたく怪鳥でも発見したかのように、山嶽を背景とした大自然の美観としてとらえ、一幅の壮大な絵画を宇宙に描いた。

直接には害を与えぬ飛行機や山嶽蛮族との遭遇は、苦難行進中の私たちを慰めさえした。それほど私たちは下界から遠ざかり、人間との交歓に飢え、心の中はカラカラに乾いた砂漠に等しかったのかもしれない。

前進方向は山また山、現実には地獄の様相を呈しはじめていた。パル出発時に10名ほどの病人は、行路の峻巖に比例して増え、いつか30名におよんでいた。ロダのなくなった状態では、重量に耐えている苦力の頑張りにも限度があり、戦友の負担が増えた。病人の小銃を持ち、肩にささえ、あえぎながら登って行く。衛生班は、二十名の病人を護るのがやっとであった。病人と、それを護る一群は、衛生班とともに野営地を先行した。

「死んでもいいからここへ寝かせておいてくれ。もう、一歩も歩けない」と、患者は手を合わせた。

「バカモノ」と指揮官は叱りとばした。四十度以上の熱帯性マラリアの熱で動けぬ者は、木の枝をくんで即製の担架を作って運んだ。一兵といえども棄てていくわけにはいかない。

死生の間を彷徨して欲も得もなくなった病人には、指揮官の叱咤は冷血無情に聞こえたかもしれない。歩けぬ者を無理やり、しかも平地ではなく、目もくらむ高い高い山

嶺を引きずり回されるのである。どこにこんな地獄があろうか。

登山隊が山小屋に病人をおいて救助隊を待つ、というような平時の登山ではない。この登山は戦争を遂行しているのであった。命令をうけているのであった。しかし、戦争であり命令であればこそ、兵士たちは言語に絶する苦難にも苦難にも耐えることができるのであった。人間の体力、精神力の限界をはるかに超える行動は、「命令」によって遂行されるということか。

「死者は出ていない。いや、絶対に一人の死者も出さんぞ」と、室軍医少尉は病兵を激励しながら豪語した。「病人は俺が引き受けている。まかせておけ。最終地ランテパオまで何カ月かかろうが、一兵も死なせはせん。大丈夫だ、がんばれよ」

軍医自身が激戦中、熱帯性マラリアに冒され、脾臓をやられて一時は見放されたことがあったらしい。病気などで死んでは申し訳ないと歯をくいしばり、異常な生命力で「死」をはねかえした。精神が死んでから肉体が死ぬ。彼は人間の精神力の底知れぬ強さを患者たちに訓えた。この患者は危ないと思ったときは、単独で付き添い、露営地に寝かせてゆっくり治療した。患者が回復してから本隊を追及した。

マラリアで死にかけた体験は私にもあった。要は、精神力がどこまで肉体の疾病に戦い得るかにあった。人間はそんなにもろいものではない。

「しっかりしろ、マラリアなんかでくたばってどうする！」

私も軍医にならって、病人を叱咤した。

しかし、健康な私たちといえども、永遠に歩き続ける地獄の亡者みたいな心境になっていた。病者をいたわりながら歩く前後の列は、のろのろ、ひよろひよろの行進で、一列縦隊の幽鬼にみえることもあった。まして病人にとっては「地獄」そのものであり、私たちの激励を青鬼赤鬼の鞭と思ったのかも知れない。

## 絶壁に挑む

私は先頭を切って進んだ。径がわかれるところでは、斥候に偵察させた。とぎれてしまふ径は灌木の枝を分岐点の入り口に積み重ね、後続部隊に通れる径と通れない径を明示しておいた。

ふかいジャングルの屋下がり、うだる暑さに、涼しい場所を見つけて小休止したくなった。戦闘に立って左右の樹木をみまわした。藤、カズラ、蔦、笹竹などがからみあって、繊維の丸い大笠がすっぽり地面にかぶさっているような蔭の空間を発見した。大自然がつくりだした造化の傑作ともいべき避暑地である。私は大股に近づいて行って、ぎよつと足を止めた。

灌木やつる草におおわれたある一か所が、風もないのにピクピク動いている。汗をふきふきなお見つめていると、茂みのフタがもぞもぞと持ち上がり、やがて静まった。そ

の中に何か潜伏していることは確実であった。おそれて退却するわけにもいかない。私は足音をしのばせて近寄り、軍刀を抜きはなした。たしかに、そこだけが丸い形に盛り上がっている。しゃがんだ姿勢で下から顔をのぞかせ、軍刀の切っ先でつる草を開いてみた。

大猪が昼寝をしていたのである。はっ、と後ろへすらぬき、飛びのき、様子をうかがった。イノシシは目をさまさなかつたらしい。ぴくぴくふるえているのは呼吸のせいだったのだ。私は、じわじわと近寄り、盛り上がった草の上から満身の勇をふるって、「やあっ」裂ぱくの気合をかけた。軍刀の切っ先はイノシシをつらぬいた。ひきぬいてみると、べっとりと血糊がついている。渡辺上等兵が走り寄ってきて、銃をかまえ、「なにものですか」と、上ずった声でいった。

「初陣の功だ。敵の首級をあげよ」

わたしはおどけて行った。二、三人の兵士が走り寄ってきた。銃剣の先で草をはらうと、大猪の死体があらわれた。私も不思議におもったほど切れ味がよかった。軍刀のたつたひと突きがイノシシの心臓をつらぬき、なんの抵抗もうけずに仕留めていたのである。

この刀は先祖代々、奥村家に伝わってきた銘刀である。私はこの刀で一人の敵兵も傷つけたことはなかった。初陣の一太刀が昼寝のイノシシにうちおろされたのは、私が経験し、なお経験しようとしている「戦争」を象徴していて、おもしろかった。私は子供のよう威張ってみせたかった。

かつて、セレベス北東部からの南下行軍中、名射撃手が一晩中かけずりまわっても仕留めることができなかった敏捷なイノシシを、軍刀の一太刀で息の根をとめたのは偶然というよりほかない。イノシシもイノシシで、とぼけた死に方をしたものであるが、人跡未踏の山の静寂と平和をものがたっていた。私たちはイノシシが昼寝する原始時代の山中をさまよっていたのである。「戦争」をおこなう現代文明人として。

連山を踏み越えて行く変転自在は、奇怪な現れ方をして私たちに驚かせる。磁石をたよりにして方向は間違っていないはずであったが、幾日も下山の日が続き、山嶺は雲の上へ高く伸び、はるかに遠ざかるような気がした。気がつくともと来た下界へ降りているのではないか。そんな錯覚におちいるほどであった。

やがて、標高七、八百メートルくらいにある「ボク」という小村に着いた。ワッカマを発つてから一週間たっていた。十日ほどあと戻りしたような印象をうけたのは、村長以下二、三人の顔役がマレー語を話し、私たちにロダ、苦力などを徴発してくれたからであった。いままでの苦力を帰して新鋭の屈強そうな山嶽土民二十名、ロダ十台はありがたかった。これより三千メートル級の山を越えねばならぬが、ちゃんとロダの通り道もあると、村長ははげましてくれさせた。だが、正直なところ、私たちはうんざりした。やっと急峻の山を越えたと思ったのに、本格的な山登りはこれから始まるという次第なのだ。

しかし、いくらうんざりしても、中止するわけにはいかない。行けば行くほど遠ざかっていくかのような山に歯ざしりしながら、翌朝はボク村をあとにして歩き出していた。地理に詳しい苦力土民を先頭にして進んだが、なんとなくはじめから振り出しにもどったような錯覚におちいる。山にはドダの通れる幅の道が、うねりくねってついているのであった。

私は、悪戦苦闘して、何度も難関を克服した。なんともうんざりしたが、すぐ奮い立って次の難関に挑んだ。体験が私をふてぶてしく鍛えて、少々のことでは驚きもへこたれもなくなった。だが、歩きながらふっと放心するとき、自分が生まれてこのかた二十数年、熱帯の山道を歩き続けているような気がした。その山道はいよいよ深く、陰しくなっていくような気がした。

たしかに、重い荷物を背負って、あえぎながら山道を登って行くのが人生かもしれない。しかし、私の場合は、比喩やことわざとしての人生ではなく、現実そのものなのである。私の年齢は人生の青春期にあり、やっと一つの峠にたどり着こうとしているところであろう。峠から次の峠に向かう。やっと目的地に達したとしても、さらに大きな山をめざすことになるだろう。歩きつづけて、果てしない人生の目的に達しえずして死ぬ。私が六十歳まで生きるとしても、今やっと三分の一の山道を歩いたにすぎない。

私は疲れて現実と夢がこんがらかった。たとえ、ランテパオの陣地まで山越えができたとしても、次の命令が待っていて、またどこかへ歩き出す。歩いても歩いても、果てしない命令がそれで絵も歩けと尻を叩く。私は中部セレベスのどこかを歩いている。いや、内地の上高地を歩いている、槍岳を望んでいる。もう、歩くのはごめんだ。

はっとして放心から醒めた。いつしか急峻の坂道にかかっている、泥どろの窪地に片足をめりこませたのである。うしろで、ロダの牛を鞭うつ馭者の声かしていた。雨の多いところらしく、ロダの車輪が泥濘にのめりこみ、もがいて動かぬ牛を必死に叱咤している声であった。両側の山肌は削り取ったような絶壁を成して草一本ない。赤い肌の山と赤土の泥濘道で、深山とは思えない地形が私をおびやかした。うねりくねって続く道は、泥濘が深まるらしい。私は、ふり向いて一息入れた。ロダには、歩けなくなった数名の病人が、口をアップアップさせながら仰向けにころがっていた。その下の坂道を、医療班が病人を押しあげ、腰にロープを結いつけてひっぱりあげながら、緩慢に一歩一歩登ってくる姿が小さく見えた。

放心中、私は絶望からくる幻覚におそわれていたのだろう。しかし、我に返って理性的に現実をみても、それは救いのない地獄の一情景であることに変わりはない。私は、わっと呐喊の声を上げて、むらがる敵兵の中へ躍り込んでいった。今、白兵船のなかで死ぬことは、なんでもないように思われた。バツサリと、このへんで人生の決着をつけたい。何千里も何万里も、敵のいない山道を歩くことが戦争なのか。こんな生殺しはごめんである。

怒りは自虐でしかない。私は苦笑してつぶやいた。

「なあるほど、これが歩兵か」そしてまた、歩き始めた。

山はいよいよ高くなり、赤土の泥濘道が尽きると、檜の木によく似た木々が多く、山道は明るくひらけた。濃霧のたちこめた遠景の連峰は模糊としているが、足下の明るい山の傾斜面を白い雲の環がとりまいていた。私たちの立っているところも、優に標高二千メートル以上あるだろう。

「いよいよ、俺たちも雲上人というところかな」

一息入れるための冗談を言い、ふたたび歩き出した。心の屈折はともあれ、私は、へこたれている部下を督励するために、外面は不死身の強さを示していなければならない。

夕刻になると、平穏な地形をえらんで露営をかさねた。分厚い万年苔のびっしりはえた路傍に、灌木を骨組みとして携帯天幕をめぐらし、分隊ごとの野営である。苔の上に毛布を敷き、あるだけの衣服を重ねてねむった。下から水分を吸って、毛布は三十分もしないうちにべとべとに濡れ、深山の夜の寒気は容赦なく私たちを襲って。夜中に起きだして薪を拾いに行く。濡れた薪がバチバチと爆ぜてやっとな火が出るまでに二時間も要した。それでも、暖は十分にとれない。夜中、雷雨に襲われると、火はたちまち消され、激しい雨水はテント内に流れ込む。雷雨がすぎると、またぞろ薪をかき集めてくる。苔原にテントがならび、焚火の灯が点滅し、黒い人影がうごめく風景は、高原のキャンプファイアーに似ていた。ただ、私たちは一晩中寝られなかっただけの話である。

朝起きると飯盒メシをかきこみ、銃をかついであわただしく出発する。かなし気な牛の鳴き声、むち打ち、叱咤する馭者の声がつづく。颯爽と歩き出す者はほとんどいなかった。よろめき、がに股で歩き出す。歩き始めは足にできた豆がうずくのである。

急峻の山道が何時間もおつづいた。私たちは三叉路につきあたった。真正面の山の峰は高くて頂上を極めがたいが、急上昇の小径が両側の叢林を貫いて登っている。一列縦隊でやっとなのぼれるほどの小径であるが、山嶺を摩すには、これを突破するしかない。一行がのぼってきたロダ道は左へ旋回し、山をとりまくようにつづいているらしい。どうしたらよいか。先頭隊の私は足踏みして、手製の書き込み地図をひらいた。

私たちはロコ川上流の分水嶺をまさに乗り越えようとする最後の断崖絶壁に立っているのだと推定した。現在地点は標高約二千七百メートル。目の前の小径を遮二無二のぼり、一気に頂上をきわめたい欲求が私の胸に奔った。ロダと別れ、健康組の底力をしめしたい。頂上を征服して、一番乗りの日の丸をひるがえしてみたい。このとき私は、はじめて純粋な登山者の情熱を感じていたといえるかもしれない。

しかし、ロダや病人をみすてて一番乗りをしたところで、敵陣地を攻撃するわけでもない。左旋回のロダ道をえらんで、何日かかっても無事に頂上へたどりつくべきか。私は、先頭の苦力に手まねで尋ねた。「ロダ径はどこまでつづいているのか。ロダ径

を行ってもあの頂上へたどりつけるのか。俺たちがこの小径を直進しても、ロダたちと合流できるのか」

マレー語はもちろん通じなかった。しかし、身振り手振りの意味はつうじたらしい。苦力も土語をまじえた手まねで懸命に答えた。左手で水平に半円を描き、右手で急坂直進コースを指し、縦の半円をつくってみせた。問答のくりかえしのなかで、やっと苦力のいうことを了解した。

「道は先で合流している。歩行者は一本急坂を行くと早くつく。ロダは左の道をいけばよい。いずれは会える」

私は中隊長に伝令を走らせ、苦力を先頭に急坂をのぼりはじめた。私は登山者の征服欲をおぼえることによって、底知れぬ生命力、意外に粘り強い健康の証を得たように思い、うれしかった。山は、見上げることもできないほど高く、私たちの上からのしかかっていた。「きつい、きつい」と兵士たちはためらった。「続け！」と私は叫んで、遮二無二先頭をのぼっていった。

坂道、というより、断崖絶壁にたどり着き一步一步よじのぼった。径の勾配は六十五度以上あるだろう。坂が垂直に見えた。人間一人しかのぼれない狭い道は、天にはしごをかけたように上にのびているが、頂上はどこなのかわからない。上を見ようとして、首を直角に曲げてみるが、苦力の後ろ姿がみえるだけである。うしろを振り返るとめまいをおぼえた。前進するしかない。

はじめは、左手に灌木の枝をついて杖がわりにし、右手で小銃をかついでいた兵士たちも、銃を肩から降ろして杖にしはじめている。地面は岩石も砂利もないすべすべの泥土で、樹木の根が這い寄って露出した個所が、自然の階段をなしているにすぎない。銃の尾床を前面の腐葉の土に押しつけ、階段の根に靴の片方の踵をあてがい、ぴよんと飛び上がる反動で前進する。よじのぼるというより垂直蛙飛びの曲芸であった。腹を急斜面に押しつける吸盤がほしい、と思ったりする。大空から俯瞰すれば、大木の幹を一行縦隊でのぼっていく蟻の行列そっくりにちがいはない。蟻になりたかった。イモムシでも、尺取虫でも、何にでもなりたかった。装具が重い。杖替わりの銃も負担になった。兵士たちは、何もかも投げ出したくなっているにちがいない。

「がんばれ、がんばれ。標高三千メートルの山を征服しつつあるんだぞ」と、私はふり向いて激励した。

疲れてくると銃がおもくなり、垂直とびの反動も効かなくなったらしい。斜面の木の根っこをふみはずしてズルズルと滑り、あっ、あつと叫びかわす声があちこちで起こる。一人が転倒すると、下の者が重量をまともにかぶって足をふみはずす。横へかわすひまもなく、手摺がわりの草木もないのだ。銃を投げ捨てまいとする兵士の本能から体の重心を失い転倒すると、連鎖転落の将棋倒しで何十人かがくずれ落ちていくのだ。列の間隔が途絶えた地点で将棋倒しはやっと止まるが、いつ、人間が空から降ってくるかわからない。ころころと転がり落ちながら、それでも兵士たちは銃を放さなかった。

こんな無茶な登山があるものか。私は転がり落ちてはまたのぼる部下たちの、凄絶とも滑稽とも言いようのない姿に憤りをおぼえた。「装具も銃も全部すてろ」咽喉までこみあげてくる言葉を、やっとかみ殺した。何物へともしれぬ憤りであった。だが、私が逆上してはならない。

苦力の山男たちは、さすがに強かった。重い荷物をかつぎながら平地に行くがごとく、足並みも軽くかつ早かった。先頭に膚接することは、このような場合、競争と同じように必要だが、私は、彼らに負けたくないという日本人の気概で、一メートルも間隔をあげまいと努めた。おそらく彼らは内心、行軍に弱い日本兵を嘲笑しているであろう。先頭の将校がへこたれるわけにはいかない。私は半死半生の登山中に、山獄土民の裸足の強さに舌をまくと同時に、皇軍のメンツにこだわっていたのである。なにものとも知れぬものに対する憤りと、苦力から軽蔑されまいとする虚栄心と誇りが、私に実力以上の力をあたえていたことは疑いようがない。私は苦力のふくらんだ荷物の肩と、ぴちゃぴちゃと腐葉上を軽くふんで行く類人猿のような褐色の裸足をながめながら「なにくそ、なにくそ」とうめき、そして進んだ。苦力の一団と私から、後続の兵士たちはかなり距離が開いた。私は岩盤や大木の根を目でさがしながら登っていたが、楓に似た葉の茂る大木をみつけて、苦力に停止を命じた。急峻の径につり下がるような姿勢であおむけに倒れ、水稻の水をがぶがぶ飲み、登ってくる後続隊との間隔がせばまるのをまった。苦力に命じてマニラロープの輪を荷物からはずし、先端を楓に似た大木の根に結びつけた。ロープの輪を投げ落とすと、ころころと坂道をころげながら伸びて、その先端は後続の列の中に到達した。もはや、標高三千メートルちかくは征服したはずであった。ロープを手繰り、数珠つなぎの格好で登ってくる兵士たちに手を振っておいて、ロープ係の苦力一人を残して、私はたちあがった。

よほど峻険な断崖でなければ、ロープは使わないつもりでいた。「頂上はすぐそこだ」という苦力の手まねに力を得て、兵士を安心させ、あと一息の激励をロープで伝えたのであった。「くそっ、くそっ、負けるものか」、うめきながら、さらに一步一步、苦力のうしろから足を踏みしめて行った。

登るにつれて、空気は希薄になった。吸う息は胸を刺し、吐く息は青い霧となった。「なるほど、青息吐息とはこれなんだな」私はあえぎながらつぶやいた。冷気が山頂からおりてくる。衣服の中は汗びっしょりなのに、手先は冷たかった。その手は腫れぼったかった。

雹がパラパラと落ちかかったと思うと、やがて雪になった。「あ、雪が降る」奇妙な感動に身内がぞくぞくした。赤道直下でも雪が降るのだ。それは、標高三千メートルの頂上に達しつつあることを告げるようであった。視界は模糊としてとらえられない。ただ。頂上はすぐそこだ、と自分に言い聞かせるだけのことで、本当のことはわからない。「九分どおりは登りつめたが、まだ半分よりきていないと思え」私は、安心は禁物だと自分を鞭打ち、唇を上に向けてパクパクと、落ちかかる粉雪をむさぼった。

頂上らしい嶺の一角にたどりついた。そこからまた、ロープを下ろした。汗だらけ、泥だらけの兵士たちが、幽鬼の群れのように這い上がってくる。遠景はかすんでみえない。あたり一面に、アオキやカエデに似た灌木がしげっていた。私は気もめいりそうに疲れており、その場にぶっ倒れたかった。苦力たちは平気な顔で腰をおろしていた。私は、わざと軍刀を杖に突っ立ち、登ってくる兵士たちを睥睨していた。なぜか知らぬが、私は頂上に花が咲き誇っていると思い込んでいた。だがここは、雑草に覆われた岩盤でしかなかった。日の丸をたてて万歳を叫ぶつもりであったが、山の頂上をきわめた歓喜は少しも湧いてこなかった。現実は一一 登っても登っても果てしない連山をさらに踏み越えて行くために、すぐ下山しなくてはならない。私は、目がくらんできた。

(第五部 完)